

ルルル社

壹 輯

土	方	定	一
楠	田	重	子
小	林	直	人
松	本	純	一
高	瀬	勝	男
中	野	勇	雄
石	川	武	夫
三	野	混	沌



覗いた景色

土方定一

乾いたおしめの間から十三の和蘭陀處女の瞬色が開いてゐる

初夏ごもならば

楠田重子

椿の葉かげで
刻前まで春の妖婆に切りさいなまれ
煙を、粉を、吐きかけられては切りさいなまれ
苦しくも酔つて酔ひしれてゐた

勇ましい彼女は
いつかこつそりかくれていつたが
菜の花畑から
眼だけをごろんと光らせてゐる

やがて私は
妖婆よ
若葉の下で初夏の陽を浴び
酔ひざめの氣を充分に呼吸し
さて！と大空を仰ぐであらう

春の樂譜

松本純一

とてもあつたかいので
青苔の石を抱く

池は
鮎の尾鰭に疲れ
お茶を喫む子供の額

腰かけた素足は鏡で
鯉のおしやべりに曇つてくる

靈魂

高瀬勝男

精いつばい はつたら
天上が暗い

心の心を燃して
今日の糧を作れ

狭つこい
俺が 躰にも

風景

小林直人

丘
畑
傾斜の植林
風
這ひあがる送電線
花片
雲
桑の木
遠い山消へ
肥料撒れ
雲雀
笹藪

鹽原泰雄・鏡角放散

風景

空氣眞鍮
太陽ぶろべら

計量しれない
尊い命があるんだ

ゑくすたしい

中野勇雄

絡みつく四肢、鳶になり
草原の上
生物二匹

太陽は月となり
月は太陽となり

雑草 燃へ燃へ
昇天する死骸ののたうち

音楽を忘れてゐる

石川武夫

はてつた臉に
鈍い灰色の霧を感じ乍ら
ゴムマリになつた血脈

曇つた硝子を通して
ふるふる女の肢体

毛虫の死骸からとび出した
蝶々が
黄色い旗をかかげた

或る百姓を見て

三野混沌

石の塊のアザが
いちめんだ
土のやうな面の上を
そして
ながいはるのひはたまりかけ
いきせく風が
よじんだ汗を拭きやがる
知らぬまゝ彼の足はガクツイテキタコトさ
はてな
けものの臭ひだ！

人間の肌は灰白い！

地の悩み

首つたまがない

手足がない

妊婦

臨月腹

◆後記◆

花が咲いて 花が散つた
櫻の木の下で ハンシユシヤと乾杯群と 路旁詩とが 眼であり
鼻であり口である
三つのリズムが集まつて空氣になつた
夏が来る！ 夏がくる！
みんなハダカになつてこの空氣を浴びるがいい

◆同人◆

石川武夫
松本純一
木川田義信
中野勇雄
小林直人
高瀬勝男
三野混沌

大正十五年五月十日

福島縣平町古鍛冶町十三

編輯當番 石川武夫

發行所 ルル社

福島縣平町一丁目

印刷所 高瀬活版所

(頒價10錢)